

次世代の先生像

-「優しい」先生ではなく、「子どもの内面を一緒に掘り下げる」先生に-

「教師にとってキャリア教育で大切なことは「一方的に詰め込むこと」ではなく、子ども自身が「考える」活動の中で意味づけ、価値付け、重み付け、方向付けていく営みを、まるでガードレールづくりをするかの様に導くことだということは前回まで触れました。本号は「じゃあ、どんな先生で在れば良いのよ？」ともう少し掘り下げてみます。

「体罰はダメだ」「強い指導はダメだ」と特にスポーツ界を皮切りとして、指導者の在り方（コーチングの仕方）が変わってきていますよね。昔の強豪校は鉄拳指導、鬼監督が右向けと言えば右が当たり前でした。昨今では青学駅伝部の原監督や青森山田高校の黒田監督、高校野球の故・小枝監督(図1)など、「スポーツを通しての人格形成」を重んじる監督達がスポーツの成果を出しながらも、子どもたちの人格教育も同時に成功しています。これってスポーツの技能だけに留まらない「ガードレールづくり」に当たるのだと思います。また、少し前に話題になった「反省させると犯罪者になります(図2)」を読みましたが、一方的、詰め込み的な反省を促すと「反省の技術」は向上するけれど、反省すべき事への自分の掘り下げや意味づけ、価値づけという本当の意味での教育的効果は薄いという内容でした。

「さて、教育現場ではどうか」というと「体罰 NG」「強い指導 NG」は分かったけど、「じゃあ、何が正解なの?」という本質が伝えられていないように感じられませんか? 結果、「個々の解釈」が横行して、「ひたすら優しい先生肯定論」とか「一定の体罰肯定論」とか、空中分解気味になっているように肌感覚では感じています。

「話題は何度もブーメランのように戻ってきますが、「考えること無しに、一方的に教え込む」と「意味・価値・重み・方向」が付かず、教育効果が上がらないのが問題で、それが今回の学習指導要領改訂の目玉でもありました。つまり、これからは「子どもにめっちゃ考えて」もらわなくちゃダメなの。そして、自分のもっている知識や技能をフル回転させて「めっちゃ考えた」先に「意味づけ・価値付け・重み付け・方向付け」を「望ましい方向」にしていけるように、先生は人知れず夜な夜なガードレールづくりをするようなコーチングしていくことが求められているんです。逆から言えば、ただただ優しくして、生徒が意味づけ、価値づけ、重みづけ、方向付けに至らなかったり、失敗したりして崖から谷へと落ちていくのを、見て見ぬ振りをしながら優しいだけで何もできない先生じゃダメなの。基礎的な学力の形成とそれを元手に考えること・選び取ること(思考・判断)、その先の主体的な表現のある授業づくり。これらは新しい学習指導要領には明記されていて、今までのキャリア教育の話ともつながっています。

「また「意味づけ・価値づけ・重みづけ・方向付け」ができるくらいまでに「考える」ためには、自分や他人との対話の中で内面を掘り下げていくことが有効で、それがまさに「主体的・対話的で深い学び」です。自分と、他人と対話する中で知識がくっつき、大きくなり、経験とつながり、意味・価値・重み・方向が付いていく(図3)。先生はもちろんその「他者」のキーマンです。

「まとめますが、「一方的にやらされ、脅され、詰め込まれる教育」の時代は過去のものとなりました。でも、次のビジョンを明らかに掲げている人はまだ少ないように思います。新学習指導要領、キャリア教育を紐解くと「子どもの内面を一緒に掘り下げながら、確かな知識・技能・経験を付け(基礎的な学力は大切だよ!)、それを元手に思考・判断し、主体的な表現につなげて、良い方向性を付けていく先生」が「次の世代の先生像」だということが見えてきます。



小枝 守

青学駅伝部監督
元大塚高校野球部監督

球児に
言葉に
力響く
「技で人は動かさず、
心が人を動かす」
小枝の技術だけ教えて、甲子園に出ようが意味はない。
心からの行動と言葉で、社会で通用する大人へ導く。

名将の人間育成論

図1



図2



図3